

見学用ガイド



CHÂTEAU DE
CHENONCEAU

シュノンソー城，貴婦人たちの城



カトリーヌ・ブリソネ（1494年～1526年）

フランソワ一世の財政長官であったトマ・ポイエの妻、カトリーヌ・ブリソネは、このユニークな城の建造を指揮し、実現に導きました。ベネツィアの宮殿の図面をもとに作られた城は「ロジ・ポイエ（ポイエの館）」とも呼ばれています。シュノンソー城の最初の「貴婦人」は、城の建物や庭園の美化に、大きく貢献しました。



ディアヌ・ド・ポワティエ（1499年～1566年）

国王アンリ二世の愛妾であったディアヌ・ド・ポワティエは、1547年にシュノンソー城を譲り受けました。ディアヌは美しさで知性に恵まれ、数々の事業に優れた能力を発揮し、その当時最も趣きがあり革新的と言われた、城の造園工事を完成させました。彼女はシェール川に橋を建築させ、シュノンソー城は世界に類を見ない建築物となりました。



カトリーヌ・ド・メディシス（1519年～1589年）

アンリ二世の未亡人となったカトリーヌ・ド・メディシスは、ディアヌ・ド・ポワティエを城から追い出し、更に庭園を美しく整え、城の建設工事を進めました。彼女は城のギャラリーを二階構造に建て直し、饗宴を催す場としました。カトリーヌは王の摂政となり、緑の書齋にて治世を執り行いました。シュノンソー城にイタリアの装飾様式を導入しただけでなく、若い国王の権力を制定しました。



ルイズ・ド・ロレーヌ（1553年～1601年）

ルイズ・ド・ロレーヌは、1589年に夫のアンリ三世を亡くした後、当時の宮廷にしきりに従って白い服をまとい、シュノンソーに引きこもりました。世の人々から忘れられ、彼女は寡婦資産を受けて細々と生活し、読書、慈善活動、祈りを日課としました。彼女の逝去以降、シュノンソー城は王族の居城としての役割を果たしていません。



ルイズ・デュパン（1706年～1799年）

啓蒙思想の世紀と呼ばれた、18世紀の知識人を代表する、ルイズ・デュパンにより、シュノンソー城はかつての栄光を取り戻しました。彼女はこの城で知識人のサロンを催し、モンテスキュー、ヴォルテール、ルソーのような作家、詩人、科学者、哲学者を招きました。フランス革命時には、その機知によりシュノンソー城を守りました。



アポリヌ、ヴィルヌーヴ伯爵夫人1776-1862

1799年、アポリヌ・ド・ギベールは大叔母ルイズ・デュパンを通じてシュノンソーの後継者であるヴィルヌーヴ伯爵と結婚した。彼らは記念碑の修復や庭園の再建など、かつての栄光を取り戻すことに全力を尽くした。植物学に情熱を持っていた伯爵夫人は、有名なグラランド アレにプラタナスの木を植え、緑の庭園を修復し、白い桑の木を再び取り入れた。彼女の優れたカイコガの繁殖は、最大の報酬をもたらした。



マルグリット・ウィルソン・ペルーズ 1836 - 1902

19世紀の産業資産家の出身であったマルグリット・ペルーズは、その好みに合わせ、1864年に城と庭園を豪華な装飾で満たす計画を立てました。彼女はディアヌ・ド・ポワティエの時代の城の姿を復元させるため、多大な費用を投じました。しかし政治的陰謀に巻き込まれた彼女は破産してしまいます。シュノンソー城は1913年まで数回に渡り売却されました。



シモーヌ・ムニエ（1881年～1972年）

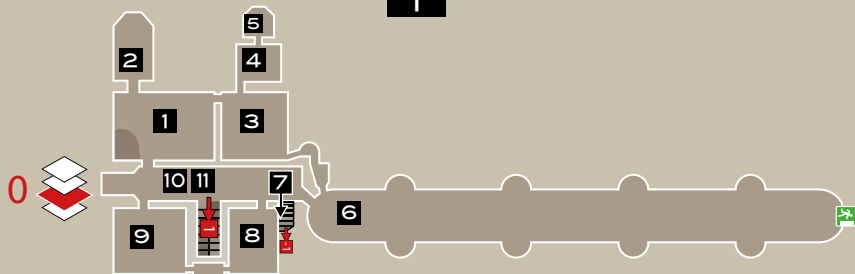
第一次世界大戦中は、戦場から離れたシュノンソー城においてさえ、戦争の影響が及びました。シモーヌ・ムニエの家族の出資（ムニエ・チョコレート工場の収益）により城のギャラリー一部は二層とも病院に改築され、彼女は看護婦長を担当し病院を運営しました。1918年まで、2000人以上の負傷兵士がこの病院に入院し手当てを受けました。そのような勇敢な行為が行われたことにより、この城は第二次世界大戦（1939年-1945年）当時までレジスタンスの活動の場として、多岐に渡り運用されました。

シェール川をまたぐシュノンソー城を建設するため、トマ・ポイエとその妻カトリーヌ・プリゾネはマルク家の城塞と水車を16世紀に取り壊し、塔の部分のみ残しました。そしてマルク家の塔はルネッサンス様式に作り変えられました。前庭は、中世の古い城の図面を再現し、堀に囲まれています。塔の脇には、マルク家の紋章であるキマイラと鷲のモチーフが刻まれた井戸が残っています。

要塞となっていた昔の水車の橋脚の上に建てられた城の方へ進むと、壮大な城門が見えます。フランソワ一世の時代に彫刻・彩色されたこの木製の門には、この城を建てたトマ・ポイエとカトリーヌ・プリゾネの家紋がそれぞれ左側と右側に見え、その上にはフランソワ一世の紋章のサラマンダーとラテン語の碑文が彫られています：“FRANCISCUS DEI GRATIA FRANCORUM REX - CLAUDIA FRANCORUM REGINA”（神の恵みを受けたフランス王フランソワとフランス王妃クロード）

テラスとマルク家の塔





この部屋に武装した宮廷の護衛が控えています。

16世紀の暖炉がトマ・ポイエの紋章に飾られています。ルネッサンス期のオーク材の扉の上には、守護聖人（聖カトリヌと聖トマ）の像が置かれ、その下にトマ・ポイエとカトリヌ・プリソネの次の金言が刻まれています。《S' il vient à point, me souviendra》すなわち、“シュノンソーが完成したならば、私の名は歴史に残る”

壁には、城での生活、結婚の申し込みや狩の場面が織られている、16世紀に作製されたフランドルの一連のタペストリーがかかっています。

ゴシック様式とルネッサンス様式の大箱。16世紀には、その中に銀器、食器、タペストリーがしまわれ、宮廷が城から城へと移動する際に使われました。

天井の梁には、カトリヌ・ド・メディシスの二つの“C”の組み合わせ文字が見られます。

床には、16世紀のマジョリカ焼タイルの跡が見られます。

護衛兵の間



護衛兵の間から、聖母マリアの像が上に据えられた扉を通して礼拝堂に入ります。

オーク材のこの扉には、キリストと聖トマが彫られており、聖ヨハネによる福音書からの引用が記されています。"INFER DIGITU TUUM HUC": "DNS MEUS ET DEUS ME" ("ここに汝の指を置け" "あなたは私の主、私の神")

スタンドグラスはマックス・アングランの1954年の作品であり、もとのスタンドグラスは1944年の爆撃によって破壊されました。

右手のロッジアには、カラレ大理石に刻まれたミノ・ダ・フィエソーレ作の聖母マリアと幼子キリストの彫刻。

礼拝堂の身廊を見下ろすように置かれた高壇は、王妃がミサに参列するための席で、1521年の日付が記されています。

祭壇の右手の石細工の祭器卓に、ポイエ家の金言が刻まれています。

壁には、1543年と1546年の日付の古英語で読み取れる碑文が今でも残っています。左はマリー・ステュアート女王のスコットランドの衛兵によって書かれたもので、入って右は「人間の怒りは神の義を働かせない」と「悪に勝つな」と刻まれている。

壁にかかっている宗教画:

-イル・サツフェラート「青いヴェールの聖母」

-アロンソ・カーノ「フェルディナンとイザベルに説教するキリスト」

-ジュヴェネ「聖母被昇天」

-セバスチアーノ・デル・ピオンボ:キリストの埋葬

-ムリリオ「パドヴァの聖アントニウス」

-15世紀のフランドル学校:受胎告知

フランス革命の際、当時の城主であったデュパン夫人の知恵により、この礼拝堂は薪の貯蔵庫として使われ、宗教性を隠したため、破壊を逃れました。

礼拝堂



1559年、アンリ二世が宮廷のスコットランド衛兵隊長ガブリエル・モンゴメリと行った謎めいた騎乗槍試合で命を落とした後、王妃カトリーヌ・ド・メディシスは未亡人となりました。彼女はディアヌからシュノンソー城を取り戻し、その代わりにショーモン・シュール・ロワール城を与えました。

フォンテーヌブロー派のフランス人彫刻家、ジョン・グージョン作の暖炉及び格天井に、アンリ二世とカトリーヌ・ド・メディシスの頭文字、HとCが組み合わされ、ディアヌ・ド・ポワティエのDを描いているように見えます。

この部分はマダム・ペルーズの出資により修復されました。天蓋ベッド、コルドバ革で作られたアンリ二世の肘掛け椅子、ベッドの脇の見事な寄木細工のテーブルはルネッサンス様式です。19世紀の美しいブロンズ像「アネット城のディアヌ」は王の寵愛を受けた女性を表しています。また暖炉の上には、ソヴァージュによるカトリーヌ・ド・メディシスの肖像画が見られます。

16世紀にフランドル地方で織られた二枚のタペストリーは次の場面を表しています。
-「力の勝利」。旧約聖書の登場人物に囲まれ、二頭のライオンが引く戦車に「力」を象徴する人物が乗っています。

上のふちには、ラテン語で「天からの授かりを心から愛する者は、信仰に従い、たじろぐことはない」と記されています。

-「愛徳の勝利」。聖書の場面に囲まれた「愛徳」を象徴する人物が、手に心を持ち、もう片方の手で太陽を指しています。ラテン語の言葉は、「危機に瀕して強い心を示す者には、死した時褒美として救いがもたらされる」と読めます。

窓の左側の絵：リペラの師、リバルタの「衣服を脱ぎ捨てるキリスト」。窓の右側の絵：ムリーリオ「聖母子」。この絵の下の書棚には、シュノンソーの古文書が保管されています。ガラスケースに陳列されている一冊に、トマ・ポイエとディアヌ・ド・ポワティエの署名を見ることが出来ます。

ディアヌ・ド・ポワティエの部屋



扉の両側の二つのキャビネットは、16世紀のイタリア製です。

壁にかけられた絵画コレクションの主な作品:

- ティントレット「シバの女王」と「総督の肖像」
- ヨルダーンズ「酔ったシーレーノス」
- ゴルシウス「サムソンとライオン」
- リベラ:「三司教」
- ジュヴネ「神殿から商人を追い払うキリスト」
- シュブランガー「寓話情景」 金属板に描かれています。
- ヴェロネーズ「女性の顔の素描」
- ヴァン・ダイク「猿と子供」
- アンドレア・デル・サルト: 聖家族
- パッサーノ: サン・ブノワの生涯の一場面
- コレツジョ: 女性の殉教者
- ジュブネ: ヘリオドール
- プッサン: エジプトへの逃亡、ヘベの誘拐、ガニメデの誘拐。

また、カトリーヌ・ド・メディシスのお気に入りの色である、16世紀の天井に元の状態で誇示されていた緑色にちなんで名付けられた。この部屋が彼女が働いていた部屋であった。夫アンリ2世の死後、王国の摂政となった彼女は、自宅のアパートからフランスを統治した。天井には彼女のイニシャルの「C」が2つつながった文字が見える。

緑の書斎



かつて図書室であったこの部屋に、カトリーヌ・ド・メディシスの仕事机がありました。ここからシェール川、中州、ディアヌの庭園のすばらしい眺めが望めます。

イタリア様式の、吊要石付きのオーク材の格天井は1552年に作製され、フランスに取り入れられた天井の様式としては初期の頃のもので

この天井に、城を建てたトマ・ボイエとカトリーヌ・プリソネの、T.B.K.の頭文字が見られます。この天井は蜘蛛の巣を防ぐために栗の木が使われている。

図書室



ディアーヌ・ド・ポワティエの部屋から、細い通路を通過してギャラリー(回廊)に出ます。

1576年にカトリーヌ・ド・メディシスは、フィリベール・ド・ロルムの設計に基づいてジョン・ピュランの施工により、ディアーヌ・ド・ポワティエの橋の上にギャラリーを建設させました。

全長60m幅6mで、18の窓があり、床には石灰岩とスレートを敷き詰め、天井梁が見えるこのギャラリーは、壮麗な舞踏会場でした。

1577年に完成した際、カトリーヌ・ド・メディシスは息子である、後のアンリ三世への敬意を込めて宴を催しました。

ギャラリーの両端に二つの美しいルネッサンス様式の暖炉が据えられ、シェール川左岸へ続く南側の扉を囲む暖炉は、装飾であり暖炉の機能を果たしておりません。

19世紀初期に、プチ・オーギュスタン美術館(Musée des Petits Augustins)に所蔵されていた、著名人を表すメダイヨンがこのギャラリーに飾られました。

第一次世界大戦中は、当時の城の所有者であったガストン・ムニエ氏が自費で城を病院に改装し、部屋は全て病院の各業務に割り当てられていました。

第二次世界大戦時、シェール川はドイツの占領地区の境を成していました。城の入口(右岸)は占領地区側に位置していましたが、ギャラリーの南側の扉は左岸の非占領地区に通じており、フランスのレジスタンスは大勢の人々をここから逃がすことが出来ました。

ギャラリー





シュノンソーの厨房は、シェール川の川床に建てられた端の二つの橋脚が形成する大きな土台の上に位置します。

配膳室は、二つの尖塔アーチで構成されている、天井が低い部屋です。16世紀の暖炉は、城内で最も大きく、その横にあるのはパン焼釜です。

配膳室は次の場所に通じています：

- 食堂は城の従業員、そして一時期はルイズ・ドロレーヌ付きの侍従が利用しました。
- 肉の貯蔵室には現在も野禽の肉を吊るす鉤や、肉を切り分けるまな板が置かれています。

- 食料戸棚には食料が保存されていました。
- 本来の厨房に至る橋 橋脚から橋脚へと移動する際に、食料補給のための船付き場を見ることができます(言い伝えによると、この場所は「ディアヌの浴場」あるいは「女王の浴場」と呼ばれていました)。第一次世界大戦中に城が病院に改装された際、このルネッサンス様式の厨房に近代的な設備が取り付けられました。

厨房



この部屋の暖炉は、ルネッサンス様式の作品の傑作の一つに数えられています。

マントルピースの上には、二人の人魚に囲まれた扉の紋章に呼応する、トマ・ポイエの金言《S' il vient à point, me souviendra》“シュノンソーが完成したならば、私の名は歴史に残る”が見られます。

部屋の家具は、15世紀のフランスの食器棚3つと、16世紀のイタリアのキャビネットです。このキャビネットは、フランソワ二世とマリー・スチュアートの結婚祝いとして贈られたものであり、真珠貝の嵌め込み細工や象牙の羽ペン画が施された見事な調度品です。

壁には、フォンテーヌブロー派のル・プリマティスの「狩の女神ディアナ姿のディアヌ・ド・ポワティエ」の絵がかかっています。この肖像画は1556年にシュノンソーにて完成され、額縁にはエタンブ公爵夫人であったディアヌ・ド・ポワティエの紋章が彫られています。

その両側には、ラヴェスタンの三人の男の肖像画、ヴァン・ダイクの自画像、そしてミーレフェルトによる「飾り襟の付いた服装の女性」。

その隣の絵は、

「狩の女神ディアナ姿のロール=ヴィクトワール・マンチーニ」です。マザランの姪であり、ヴァンドーム公ルイ二世の妻、メルクール公爵夫人であった彼女は、17世紀にシュノンソー城の所有者でした。

窓の両側：スルバランの「アルキメデス」と「二人の司教」(17世紀始め)

暖炉の右側にはファン・ローの「三美神」。ルイ十五世が相次いで寵姫としたネールの三姉妹、シャートルー夫人、ヴァンティミア夫人、マイイー夫人がモデルとなっています。

フランソワ一世のサロン



ルイ十四世は、1650年7月14日のシュノンソー訪問を記念し、後にリゴーによる肖像画、オービュッソン織りのタペストリーに覆われた家具、そして高名な家具師ブールの小テーブルを、叔父のヴァンドーム公爵に贈りました。肖像画の見事な額縁はルポートルの作であり、大きな4つの木片のみで組まれています。

ルネッサンス様式の暖炉の上に見られる、サラマンダーと白鼬の紋章はフランソワ一世と王妃クロード・ド・フランスの滞在を表しています。

梁天井を囲むコーニスにはボイエ家の頭文字(T.B.K.)が見られます。

東側の壁には、ナポレオン一世がスペイン王として即位させたナポレオン一世の兄、ジョゼフ・ボナパルトから購入したルーベンスの「幼いキリストとバプテスマのヨハネ」が見えます。また、このサロンには17世紀と18世紀のフランス絵画のすばらしいコレクションが見られます。

-ファン・ロー「ルイ十五世の肖像画」

-ナティエ「ロアン公爵夫人」

-ネッチェル「ルイ14世の大臣、シャミヤールの肖像」と「男の肖像」

-ジョン・ラン「スペイン王フェリペ五世の肖像」(ルイ十四世の孫)

また、ミニヤールが描いたルイ十四世の銀行家、サミュエル・ベルナルルの大きな肖像画も見られます。

富豪サミュエル・ベルナルルは、デュパン夫人の父でもあり、ナティエによる肖像画には、優美と知性あふれる彼女の姿が描かれています。

婚姻関係により、ジョルジュ・サンドの祖母にあたるルイーゼ・デュパン(1706~1799年)は、18世紀にシュノンソーの城主となりました。百科全書派を支持し、ヴォルテール、ルソー、モンテスキュー、デイドロ、ダランベール、フォントネル、ベルナルダン・ド・サンピエールを城に迎えました。フランス革命の際、シュノンソーは彼女の人徳により破壊を免れたとされています。

ルイ十四世のサロン



ホールの天井は一連の尖塔アーチで形成され、要石をずれた位置に取り付けることで折れ線を描いています。

花籠飾りは、葉、バラ、天使の顔、キマイラ、豊穡の角(コルネ・コピア)で装飾されています。

1515年作のこの装飾は、フランス・ルネッサンス様式初期の、最も美しい装飾彫刻の一つとされています。

入口の扉の上部のニッチ(壁のくぼみ)には、シュノンソー城の守護聖人、バプテスマのヨハネと、ルカ・デル・ロピア風のイタリアの聖母の彫像が置かれています。ヴェネチアの獅子を頂く、イタリア大理石のハンティングテーブルはルネッサンス様式です。玄関ホールの端には、18世紀の木製の聖母子像があります。入口扉の上部に配されている現代的なステンドグラスは、巨匠マックス・アングランの1954年の作品であり、聖フェルトゥスの伝説が描かれています。

ホールから16世紀のオーク材の扉を通ると、階段に出ます。

この扉には、古い戒律(一冊の本と巡礼者の杖を持ち、目に包帯を巻いた女性の顔)と新しい戒律(棕櫚と聖杯を掲げ、顔をあらわにした人物)を意味する彫刻が施されています。

二階へ上がる階段は、イタリアの真っ直ぐな(傾斜部分が重なるように作られた)階段を模して、フランスで作られるようになった初期の頃のものです。天井部は傾斜が付いたヴォールト(丸天井)になっており、直角に交差するリブが組まれています。

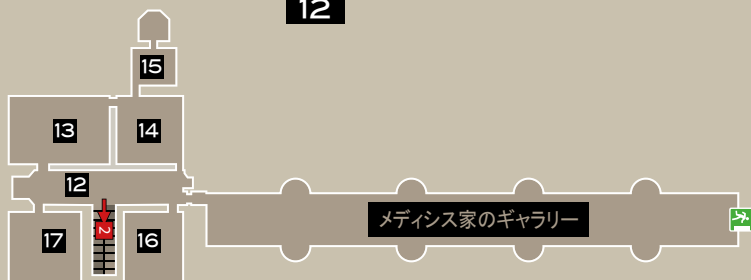
交差部の合わせ目には要石が配され、格間は人の姿や、果物、花の彫刻で装飾されています(一部はフランス革命時に破壊されました)。

二つの傾斜部は、手すりのあるロτζアである踊り場で区切られ、ここからシェール川を眺めることができます。

二番目の上り口には、髪が乱れた女性の胸像を表した、当時の美しいメダイオンが飾られています。階段の他の箇所にも、このようなメダイオンが見られます。

ホール





二階のホールの床には、短剣に貫かれた百合の花の紋章が押されている、テラコッタの小さなタイルが敷き詰められています。

天井には梁が見えています。

扉の上には、カトリーヌ・ド・メディススがイタリヤから取り寄せた大理石のメダイオンが飾られています。古代ローマの皇帝(ガルバ、クラウディウス、ゲルマニクス、ウイテリウス、ネロ)を表しています。

壁にかかっているのは、ヴァン・デル・ムーレンの下絵による狩の場面が織られた、17世紀のオードナルドの6枚のタペストリーです。

前室はバルコニーに面しており、そこからマルク家の塔とテラスの景色を眺めることができます。これはかつての中世の要塞のレイアウトを示している。

右側には土手に囲まれ、入口の事務所の管理人が手入れしているディアヌ・ド・ポワティエの庭園が見え、その反対側には真ん中に池を配した、よりひっそりとした佇まいのカトリーヌ・ド・メディススの庭園が見られます。

カトリーヌ・ブリソネのホール



この居室は、カトリヌ・ド・メディシスの2人の娘と3人の義理の娘を記念して名付けられました。

2人の娘：

王妃マルゴ（アンリ4世王妃）、エリザベート・ド・フランス（スペイン王フェリペ2世王妃）、3人の義理の娘：

メアリー・ステュアート（フランソワ2世王妃）、エリザベート・ドートリッシュ（シャルル9世王妃）、ルイズ・ド・ロレーヌ（アンリ3世王妃）。16世紀の格天井は、ルイズ・ド・ロレーヌの居室の入り口の間にあった天井の板張りです。

暖炉はルネッサンス様式です。

壁には、16世紀にフランドル地方で製作された一連のタペストリーが掛けられており、そこにはトロイアの包囲、ヘレネの略奪、コロセリウムでの競技、ダビデ王の戴冠が描かれています。

暖炉の左には、サムソンの生涯を描いた16世紀のタペストリーの一部が見られます。

家具は、大きな天蓋ベッド、木製極彩色の二つの女性の胸像で飾られた棚二架（15世紀ゴチック様式）、そして、鋳打ちの旅行用トランクと、ルネッサンス様式の二つの椅子と二つのテーブルで、テーブルの一つは城にふさわしいターブル・ドゥ・シャトーです。

壁に飾られている絵画：

-ルーベンス「東方の三博士の訪問」。これはプラド美術館が所蔵する絵画の習作であり、スペイン王から購入しました。

-ミニャール「オロンヌ公爵夫人の肖像」

-17世紀のイタリア派絵画「アルゴ船員アドメスを訪ねたアポロン」

五人の王妃の居室



カトリヌ・ド・メディシスの居室は、彩色され金泥が塗られた、木製の格天井で覆われています。天井の格子内に様々なイニシャルが見られます。メディチ家の紋章と、中央にカトリヌの“C”とアンリ二世の“H”が組み合わさったイニシャルが表されている部分があります。その他の天井部は、緑の書斎に合わせ、植物を模った彫刻で装飾されています。この居室には彫刻家具が揃い、16世紀の貴重なフランドルタペストリーがかかっています。タペストリーには聖書の一場面である、サムソンの生涯が描かれています。

この一連のタペストリーの特徴は、縁に諺を象徴する動物が織り込まれていることです。

「器用は策略に優る」(“l’Habilité est supérieure à la Ruse”)の諺や、ザリガニと牡蠣が縁に織られているのが見えます。

この部屋の中央にはルネッサンス期特有の天蓋付きベッドが置かれています。ベッドの柱と横羽目板には彫刻が施され、古代のメダルから着想を得た人物の横顔の浮き彫りも見られます。

ベッドの右側には、木版に描かれたコレッジョの「愛の教え」がかかっています。この題材がカンバス地に描かれている作品は、現在ロンドンのナショナルギャラリーに納められています。

暖炉とその装飾、赤レンガの床はルネッサンス期のものです。

カトリヌ・ド・メディシスの居室



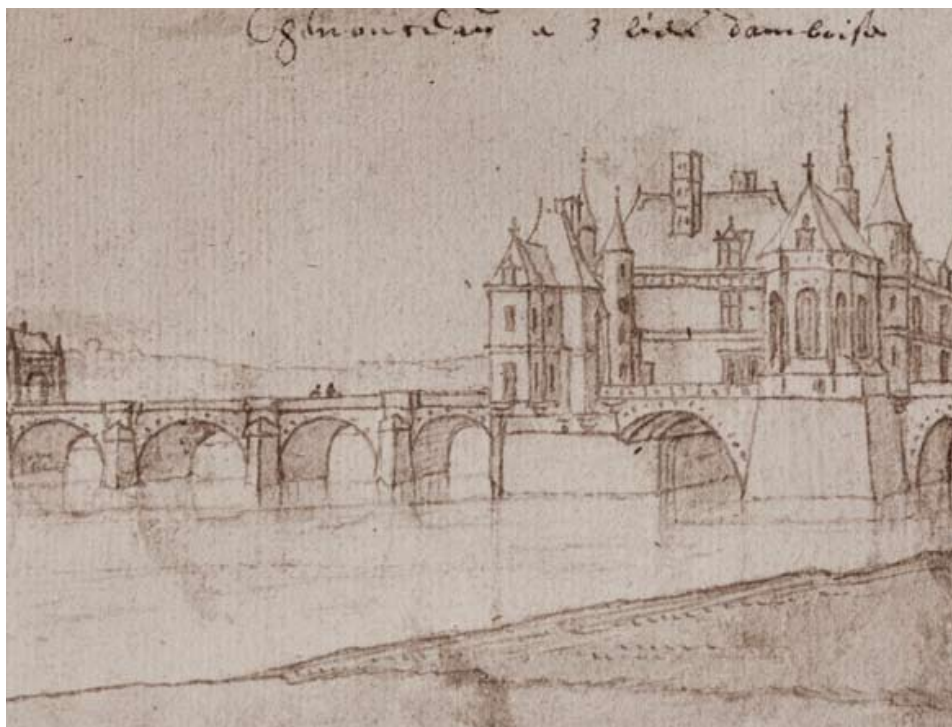
カトリーヌ・ド・メディシスの居室からは、続きの版画展示室となっている、小さな二つの部屋に移動することができます。最初の展示室は、18世紀にデュパン夫人のためにシュノンソーに装飾が加えられた際の、美しい絵天井に覆われ、優美な暖炉が据えられています。

二番目の展示室はシェール川に向かって開いており、天井と暖炉はルネッサンス期のものです。

ここには各時代のシュノンソー城の姿を表した、様々な技法とスタイルの素描と版画のコレクションが展示されています。16世紀のディアヌ・ド・ボワティエの時代のサンギーヌ（赤チヨーク）素描は、シェール川をまたぐ橋が描かれた最初の作品です。それから19世紀の建築家による水彩画に至るまで、シュノンソー城の建設と造園の進展、歴代の所有者のもとにおけるプロジェクトの数々が見られます。

シャトーの2階に新設された、メディシス家のギャラリーにて、これまで公開されていなかった絵画、タペストリー、家具調度品、芸術作品が展示されます。ピーエール＝ジュスタン・ウーヴリエ（1806年-1879年）による油彩画「シュノンソー城」、ヌイイーの1883年のタペストリー「シェール川」、17世紀以前の2部に分かれた食器棚、シュノンソー城が当初所有し、外部に移された後返還された家具調度品、「メディシス家のヴィーナスの像」、そして見逃してはならない、「キャビネ・ドゥ・キュリオジテ」（珍奇陳列の小部屋）などを御覧になることができます。また、シャトーの建設の過程とその歴史に残る事柄について知ることができる、数々の書類と古文書も展示されております。シュノンソー城の運命を数世紀にわたって守り通した6人の女性たちに関する伝記が、このギャラリーの見学をより豊かなものとしてくれるでしょう。

版画展示室



ここは王アンリ四世とガブリエル・デストレの息子、ルイ十四世の叔父、そして1624年にシュノンソー城の城主となったヴァンドーム公セザールの思い出が残されている部屋です。鉄仮面の男とは、彼の次男、ボーフォール公フランソワ・ド・ヴァンドームにほかならない。マザラン枢機卿暗殺未遂事件の後、ヴァンセンヌに投獄されたが、信じられない状況で逃亡した。この出来事の後、セザール・ド・ヴァンドームは和解を確実にするために、長男ルイ・ド・メルクールとマザラン枢機卿の姪であるロール・ヴィクトワール・マンシー二との結婚について交渉した。この祝典は1650年7月14日にルイ14世、王太后、枢機卿の立会いのもとシュノンソーで行われた。このため、サロンには君主自身が提供した肖像画が飾られており、君主の名前が刻まれている。若いカップルには、1651年2月4日にパリで行われた結婚式で結婚祝いとしてシュノンソーが贈られた。

部屋には以下の調度品が展示されています。

- 梁の見える美しい天井には、蛇腹を支える大砲が飾られています。
- ルネッサンス期の暖炉は、19世紀に金色に彩色され、トマ・ポイエの紋章が描かれています。
- 西側の窓の両側に、17世紀の木製の女像柱が二本据えられています。
- 壁には、17世紀の三枚の連続したブリュッセルのタペストリーがかかっており、ギリシャ神話のデメテルとペルセポネが描かれています。

ブリュッセルのタペストリーの特徴である華麗な縁飾りは、豊穡の角から溢れ出る果物や花をモチーフとしています

この部屋の天蓋ベッドと家具はルネッサンス期のもので、
窓の左側の絵：
- ムリリヨ「聖ヨセフの肖像」

セザール・ド・ヴァンドームの居室



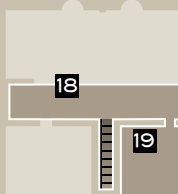
ここは王アンリ四世の愛妾であり、後に王の嫡出子となったセザール・ド・ヴァンドームの母であるガブリエル・デストレの部屋です。梁の見える天井、床、暖炉、家具はルネッサンス期のものです。

天蓋ベッドのそばにかけられた、16世紀のフランドル製タペストリーには、「城の日常の風景、愛情」の題名が付けられています。

それ以外の三方の壁には、「ルカの月暦図」と呼ばれる珍しいタペストリーがかかっています。六月：蟹座、羊の毛刈り、七月：獅子座、鷹狩り、八月：乙女座、収穫人の支払い。図柄はデューラーの友人であった、ルカ・ド・レイドによって描かれました。キャビネットの上の16世紀の作者不明の絵画は、音楽家の守護聖人である聖セシリアを描いたものです。

ガブリエル・デストレの居室





19世紀に当時の城主であったペルーズ夫人のために、ヴィオレール・デュックの弟子であったロゲが修復を行いました。このホールにはその当時の姿がそのまま残っています。

16世紀のオードナルド製タペストリーは、コンボの戦いの様子を表しています(1389年6月15日のコンボ平原での戦い)。バルカン諸国のキリスト教の王族と、オスマン帝国の対立によるこの戦いの決着は不確定でしたが、セルビア女王ミリカと皇帝バヤズイト一世が和平条約を結ぶことで終わりを迎えました。

タペストリーの両側には、シュノンソー城を描いたピエール＝ジュスタン・ウーヴリエの作品が展示されています。二つの戸棚、テーブル、床張りはルネッサンス期のものです。

玄関ホール ブルボン＝ヴァンドーム



ルイズ・ド・ロレーヌは、夫のアンリ三世が1589年8月1日に修道士ジャック・クレモンに暗殺された後、瞑想と祈りのためシュノンソーに引きこもりました。

彼女を支え続けた、数少ない従者たちに囲まれて、王室の喪中の作法に従って常に白い服を身に着けていたルイズ・ド・ロレーヌは、「白い王妃」と呼ばれるようになりました。

この部屋は、当時の状態のまま残っている天井に合わせ、復元されました。死の悲しみを象徴する鳥の羽(大羽根“Penne”が心痛“Peine”を象徴する)、銀の涙、墓堀人のシャベル、未亡人の編み紐、茨の冠、ルイズの頭文字であるギリシャ文字ラムダ(Λ)とアン

リ三世の頭文字エータ(H)を組み合わせた模様が、この部屋全体に描かれています。フランソワ・クルーエによるアンリ三世の肖像画が隅の小塔にかかっています。

ゴシック様式に従った茨の冠をかぶったキリスト、宗教画(16世紀の祭壇の一部)、祈祷台が、この部屋の敬虔で陰鬱な雰囲気強調しています。14世紀の大理石の彫刻は、ニノピサーノによるトラーバニの聖母像です。ベッドや家具は16世紀のもです。

ルイズ・ド・ロレーヌが側に仕えさせていたカプチン会の修道女たちは、17世紀に修道院に戻るまで、城の4階で暮らしていました。

ルイズ・ド・ロレーヌの居室





ディアーヌの庭園

ディアーヌ・ド・ポワティエによる造園の時代から、花壇の構造は変更されていませんが、現在の図案はアシル・デュシェーヌ（1866年-1947年）によるものです。この庭園は、かつてカトリヌ・ド・メディシスの近習の邸であった事務局が発注しました。

直角に交差する小路と斜めに交差する小路が、ワタスギグクの渦巻き装飾のある8つの三角形の芝生を縁取っています（12,000m²）。その中央には、造園された当時の噴水が再現されました。

シェール川の増水被害を受けないよう作られた土手の上に、飾り鉢が配してあり、見学者は低木、イチイ、桎、柘植、ローリエが植え込みに躍動感を与えている風景を眺めることができます。夏には、ここで百本以上のハイビスカスが花を咲かせます。それらの低木や花壇が、この庭園の厳格なほど幾何学的な構成を際立たせています。

庭を囲みテラスを支える壁全面を覆うように、アイスバーグ種の蔓バラが植えられています。



カトリーヌの庭園

カトリーヌ・ド・メディシス王妃の庭園はより控えめでありながら(5500m²)、優雅な印象を与えます。

シェール川とパークに面している庭園の散歩道からは、城の西側のファサードを眺めることができます。上品な円形の池の周辺に5つの芝生の庭があり、刈り込まれた柘植がリズムカルに植えられています。庭園の東側は、城の堀の上部に位置する低い石垣に囲われており、「クレール=マタン」種のバラが壁面に沿って誘引されています。木立バラが調和の取れた縁取りを成しています。北側の緑の庭園とオランジュリーに向かって開ける眺望は、ベルナール・パリッシーの考案によるものです。



緑の庭園

この庭園は1825年に、その当時城の所有者で高名な植物学者でもあったヴィルヌーヴ伯爵夫人のためにシーモア卿が考案しました。公爵夫人の希望に沿い、緑の庭園はイギリス式で、カトリーヌの庭園の北側に位置しています。

囲いのある芝生の庭園には、珍しい樹木のコレクションが陰を落としています。1世紀以上前から枝を茂らせているそれらの樹木群は、プラタナス3本、アトラススギ3本、スペインモミ1本、アメリカキササゲ1本、マロニエ1本、ベイマツ2本、セコイアスギ2本、アカシア1本、胡桃の木1本、セイヨウヒイラギガシ1本で構成されています。

ルネッサンス様式の噴水の正面には、“Hortulus”（ラテン語で“小さな庭”）が配され、ロワール渓谷の多様な植物と様々な種類のブドウ品種を見ることができます。

16世紀に、カトリーヌ・ド・メディシスは動物小屋と鳥小屋を設けるためにこの場所を選びました。



ラッセル・ペイジ記念庭園

城のアーカイブに保管され、最近発見された未発表のラッセル・ペイジのオリジナルの図版にインスピレーションを得て、この庭園は造られました。

2018年夏にオープンした庭園は、現代活躍中の多くの若きクリエイターたちの師であるこの偉大な造園家にオマージュを捧げています。彫刻家であり、ブロンズアーティストのフランソワ＝グザビエ・ラランヌの動物たちが、1991年に開催された素晴らしい回顧展以来、ふたびシュノンソー城の“英国”風庭園の花壇を美しく飾ります。ラッセル・ペイジとフランソワ＝グザビエ・ラランヌ、それぞれの独自の世界が照応し、あらゆる夢を可能にし、動物と植物が出会う、一つの芸術作品が生まれました。

ラッセル・ペイジは、画家がパレットの準備をするように、自らが造ったすべての庭園の中に、小鳥たちの歌声、そして花々の色彩によって彩られた理想の庭園を実現させました。庭園は、訪れる人々を感動させ、子供のころの素直な感情を蘇らせてくれます。



花畑

花畑も見学コースに含まれており、寛いだ散歩に適しています。花畑は林檎の木とクィーン・エリザベス種のバラに囲まれた、12の四角形の畑で構成されています。城の役10人の園芸家たちは、城の装飾に使われる百種類もの観賞用の花と400本のバラの木を育てています。また、見学者はここで数多くの野菜と植物を観察することができます。その他に、珍しいチュベローズやアガパンサスの花などが植えられています。昔の温室のなかでは、黄水仙、アマリリス、水仙、チューリップの球根や苗木が育てられています。隣のロバの牧場だけでなく、見学者はこの花畑で多くの鳥や小動物に出会うことがあります。



迷路

城の70ヘクタールの林の空地に、カトリーヌ・ド・メディシスの命によって、二千本のイチイが植えられた1ヘクタールのイタリア式迷路が作られました。中央の小高い位置に東屋があり、迷路全体が見渡せるようになっています。東屋は柳で囲まれており、ヴィーナスの像が置かれ、その脇には若いパックスを抱いたニンフの像が、ヒマラヤスギの柱の上に据えられています。柘植と蔦の植えられている鉢に縁取られている並木道が迷路を囲み、東側にはジョン・グージョンの作品である複数の女像柱が見られます。

それらのパラスとキュベレを表す女像柱、そしてヘラクレスとアポロを表す男像柱はシュノンソー城の正面を飾っていましたが、迷路の裏側に移動させられました。

ドームの館

施工主がカトリーヌ・ド・メディススであるこの館の釣鐘屋根は、「フィリベール・ド・ロルム式」と呼ばれています。内部には王妃の薬局、科学展示室、レストラン、そして歴史のあるワイン貯蔵倉があります。



王妃のアポセカリー（薬局）

シュノンソー城にその名を遺した貴婦人、カトリーヌ・ド・メディススの命により建設されたアポセカリー（薬局）が、当時と同じ場所に再現されました。この広く新しい展示スペースでは、アルバレロ、キャンボンポット、錠剤容器、シュブレット、テリアカ用ポット、乳鉢の希少なコレクションが見られ、ロワール渓谷地域でも珍しいものです。初期の薬調合には、鹿の角、ザリガニの目玉、ナメクジ、ヒキガエル、カタツムリの粘液（これは現在も使われています）が用いられ、「魔女の薬」のようでした。次いで、植物を原料にした薬が調合されるようになりました。よく使用される薬草は、当時の主な薬品の原料を成しており、城の薬草園で栽培されていました。



科学展示室

ここではシュノンソー城で1743年から1747年にかけて考案された、他に見られないコレクションが展示されています。これらの貴重な「機械類」の大部分は、当時の城所有者の息子デュパン・ドウ・フランキユイユ（社交界で高名だったマダム・デュパンの夫）が制作したものです。それは1750年の「学問芸術論」の著作で知られ、彼の秘書であったジャン＝ジャック・ルソーの助けを借りて実現されました。それぞれ動力、光学、天文学の分野の研究と教育を目的に使用されていた、珍しい一連の機械です。歴史上最初の展示室は、自然科学を扱った世界の珍物博物館に続くルネッサンス時代の展示室に始まりました。18世紀にそれはシュノンソー城にある物理学展示室（科学展示室）へと発展した後、こんにちの博物館になりました。

オランジュリー

緑の庭園に面したオランジュリーは、18世紀と19世紀に建てられました。元々は冬の間にレモンとオレンジの木を保管しておくための建物でしたが、現在はここで珍しい樹木のコレクションを見ることができます。この安らぎに満ちたオランジュリーのテラスからは、城の美しいシルエットが望めます。この建物全体は、企業のレセプションやプライベートなイベントのために予約することができます。



オランジュリーとサロン・ドウ・テ（喫茶室）

昔は冬の果樹園だったこの建物で、フランス料理とパティシエ・シェフが作る当城オリジナルのパティスリーをお楽しみになれます。



ドームのワイン貯蔵倉

何世紀もの時を経てきたシュノンソー城のブドウ畑から、代々の城主により名高い特級ワインが生産されてきました。16世紀に造られた歴史あるドームのワイン貯蔵倉はその丸天井が特徴的です。ここではAOC トゥールレーヌ・シュノンソーを始めとするワインについて知り、試飲と購入や、ワイン生産にちなんだお土産を買うことができます。



フランクエーユ公園

シエール川

シゲシ公園

大遊歩道

シノー公園

- 1 チケット売り場
- 2 迷路
- 3 女像柱
- 4 管理事務所
- 5 ティアーズの庭園
- 6 城-テラス-マルク家の塔
- 7 カトリックの庭園
- 8 ボームのテラス
- 9 科学展示室
- 10 アボセカリー(薬局)
- 11 ボームのライオン貯蔵倉
- 12 レストラップ オランジュリー
- 13 緑の庭園
- 14 ラツセル・ペイジ記念庭園
- 15 16世紀の農場
- 16 花畑
- 17 薬草園
- 18 ロバ公園
- 19 ピクニックエリア
- 20 ビクニックエリア(屋根付き)